

2017 年度世界展開力強化事業 ブラジル短期留学 帰国報告書

国際食料情報学部 食料環境経済学科 3年 青山 凌

私は今回の世界展開力強化事業にて、主にサンパウロ大学、アマゾン農業大学、トメアスの日系農家へのファームステイを含めた8月18日から9月17日までの期間で留学をさせていただきました。

このプログラムに参加した当初の目的としては主に二つありました。一つ目に私は学校で農業経済について専攻しており、自主的に農産物の販売活動を行っていたため、ブラジルの農業経済や農産物の販売形態について興味があり、現地に視察したかったこと。二つ目は私自身がブラジルの留学生と交流する機会が多かったため、ブラジルでの価値観や生活観について興味があり、現地の学生や農家さんとの交流を通じて、理解する。この二つが当初の目的でした。

まず到着した初日に農大会館 OB の方々のお話を伺いました。私たちの知らない時代の農大やブラジルの内情について深く語っていただき、初日から農大のブラジルとのつながりを感じました。その次の日の朝、現地の野菜市場（フェーラ）に出かけました。そこはとにかく農産物の種類が豊富で熱帯原産のパッションフルーツや、マンゴスチンはもちろん、中にはしいたけやキュウリなど日本の農産物も置いてあったこと、量もかなりの量をピラミッドのように積んでいたこと、試食で出た生ごみは店の下に投げること等、日本の野菜市場に馴染んだ私にとっては新鮮味のあふれる光景でした。



野菜市場の様子

その後、サンパウロ大学の農学科へ向かい、農学科の教授による授業や、ポルトガル語の授業、学生団体の活動報告、大学機関の視察などを通して勉強させていただきました。

その中でも特に印象に残った機関は **CEPEA** と **casa do produtor rural** でした。

CEPEA ではブラジルの主要な農産物の約 30 品目の対象に、ブラジル国内の市場価格や国際価格、ブラジルの農業 GDP の算出、データ分析まで多岐に渡るブラジルの農業データの中核を担っている機関です。主に在学中の学生が上記のデータの算出のため、自分たちで農家や専門家と直接電話してコンタクトを取り、インターネットや情報誌にて、データを公開しています。

日本では政府の役割である GDP の算出を学生が担っており、なおかつ多数の企業に協賛されていることに驚きました。

casa do produtor rural はブラジル国内や海外の小規模農家を対象にした、大学の農業知識や技術提供を行う団体です。

内容は露地栽培から施設園芸農業、養蜂など幅広く、学校内の農場で検証し、メールや電話、時にはわかりやすいように動画を撮って情報提供をするそうです。

CEPEA も **casa do produtor rural** もサンパウロ大学以外の学生もインターン生としてプロジェクトに参加することができます。学校内の活動でありながら、学生が主体となり、企業や農家に対して責任を持って情報提供をしているという点。また広大な土地があるため、自分たちで農場を持ち、管理することで、より実践的な知識を身に着けられている点に、現在日本にはない魅力的な組織だなと感じられました。

サンパウロ大学の学生との交流として、学生寮でのシュハスコに誘っていただきました。

ブラジルでの学生生活やルール、卒業後について聞くことができ、とても有意義な時間でした。また私たち側からは、空手の演武、折り紙や着物の着付けといった日本文化交流会も開催しました。

サンパウロ大学に約一週間滞在した後は、パラ州のアマゾニア大学ベレンキャンパス、トメアスキャンパスを見学しました。特にベレンのキャンパスは広大でアマゾン川のすぐそばにあるため、サンパウロとはまた違った、よりアマゾンらしい植生が見られて興味深かったです。

その後移動したトメアスでは **CAMTA**(トメアス総合農業協同組合)やジュース工場、日系移住資料館の見学、ファームステイをさせていただきました。

トメアスは戦前からの日本人の移住地で、かつてはコショウで栄えた町でしたが、病害によりコショウの栽培が難しくなったため、果樹を中心とした樹木作物による複合栽培農法のアグロフォレストリーを取り入れ、現在ではブラジル国内のアグロフォレストリーの成功例を出した町として広く認識されています。

アグロフォレストリーのメリットとしては、多種に渡る作物を扱うことで、モノカルチャーと比べ、天候や病害等による不作や、価格変動をカバーできる点、土壌、森林保全や荒廃地の回復、生物多様性にも繋がる点があります。

またファームステイで実際に伺った鈴木さんの農園では、アブラヤシをベースにアンジェローバ、アサイー、カカオ、パッションフルーツ、イッペイ、バカバ、パラパラ、バカビなどの混植を行っていました。アサイーとカカオの初期は日に弱いため、アブラヤシで日陰を作り成長を促す必要があるそうです。

鈴木さんの農園の主な栽培作物はアセロラ、コショウ、アブラヤシで約 300 町歩の広大な農地でした。中でもアブラヤシの生産量を年々増加しているそうです。その理由として収穫の周期が非常に短く、約二週間おきに収穫でき、ピークの 10.11 月では 10 日間で収穫できるそうです。

ファームステイでは農場見学のほか、コショウ、アセロラ、カカオの収穫を体験させていただきました。

CAMTA では、ジュース加工工場、冷凍施設、集荷場があり組合員から出荷されたカカオ、コショウの集荷と加工、アセロラやパッションフルーツ等の果物の搾汁、保存をしていました。コショウは市場価格を参考に頃合いを見て出荷し、カカオは明治製菓と提携を結び、独自のバナナの葉を使った発酵方法を用いることで、明治製菓が買い付けて、日本に輸出されています。実際に日本に輸出されている農産物の一例を見ることができて興味深かったです。

今回の留学の反省点としては、事前のポルトガル語や英語の語学不足を強く感じました。サンパウロでの授業はほぼ英語で行われましたが、理解が追い付かない場面が多く、今思うと残念に感じます。またポルトガル語については現地でいくつか授業を聞いたり、現地で生活していく上で身につく場面は多々ありましたが、やはり会話できるほどの語学力はつかなかったため、今後は農大で留学生や授業で引き続き勉強したいと思います。

次に私自身の日本の農学に関する知識不足、経験不足が挙げられます。現地の学生に日本の農業について聞かれた時に、答えに窮することが多々ありました。特に専攻外の土壌や病理などについてはなにも返すことができませんでした。よって自分の専攻している農業経済以外の知識にも興味を持ち、勉強していきたいと思います。

また今後はより実践的な知識や経験を得るために、農家への訪問や企業と農大をつなげられるような活動をできたらと思います。ブラジルの学生に感化された部分もありますが、社会的責任を持てるような学生生活を送りたいと思います。

プログラムの要望としては、ブラジルでの大規模農家や日系以外の農家さんへのファームステイも体験してみたいなと感じました。トメアスの農家さんの例も非常にいい経験になりましたが、大豆やとうもろこし、サトウキビなどのモノカルチャーでのプランテーション農業もブラジルを代表する農業だと思うので、見に行きたかったなと感じています。

また近いうちにアサイーの収穫に再チャレンジしに伺いたいと思います。

お世話になった皆様に感謝しています。ありがとうございました。



アサイーの収穫



トメアスで記念撮影